児童英語教育が東洋学園の英語教育に示唆すること

坂　本　ひとみ

Abstract

This paper tries to make some suggestions for the improvement of English education at Toyo Women's College and Toyo Gakuen University, making use of some ideas of how to teach English to children. As a member of the English Language Education Development Center, which Toyo Gakuen established in April 2004, I intend to shape my thoughts on some fun and effective methods for teaching university-level English.

1．はじめに

私が児童英語教育の講習を受けに行ったとき，前に立って teaching demonstration をさせられた。インストラクターの方にほめて頂いて嬉しかったのであるが，そのときに気づいたことは，何年間も教壇に立っていながら，自分の授業を誰かに見て頂いて評価をうかがうことなど一度もなかった，ということであった。小学校，中学校，高校の先生方は研究授業を行い，互いに授業を見学して意見を出し合う。が，日本の大学教員は一般的に言って，授業の内容は重視するが，授業方法に対する意識は高いとはいえず，互いの授業を見学しあって研究することなどほとんどないのが実情である。

2004年４月にスタートした「東洋学園英語教育開発センター」は，このような実情を改革し，50年以上にわたる東洋女子短期大学の英語教育の歴史と伝統を引き継ぎながら，現代の情勢に合ったよりよい英語教育のノウハウを編み出すために設立されたものである。目下，このセンターの構成メンバーにとって，日本の大学生のニーズに合った英語教育改革は必死の急務であるので，私が今まで児童英語教育を研究しながら考えたり授業の中で試してみたりしてきたことを，ここにまとめてみたいと思う。

児童英語教育を学ぶことは，私がふだん自分の大学で行っている英語教育を見直すきっかけとなり，teaching method の細部にまで意識的になるようにしてくれた。児童英語教育は

英語教育の基本中の基本ともいえるので，この視点から東洋学園の英語教育について考察を加えてみたい。

2．リスニングを中心とした指導技術

赤ん坊がどのように言葉を話せるようになるかを考えてみると，生まれてから1年半くらい沈黙の時期（silent period）があって，母親を始め周囲の人々が話しかけてくれる言葉をひたすら聞いていて，それがインプットとなり，その後，自らも簡単な言葉を発するようになる。そして，徐々に語彙がふえていき，統語法を習得して，文章を話せるようになっていく。そのうち，母親が絵本などやさしい本を読んでくれるようになり，文字を覚えていき，自分でも読めるようになっていく。そして，自分でも書くようになる。そこで言葉の4技能の習得のピラミッドは図1のように表せる。

子どもに英語を教える際はこの自然なプロセスに従って，まず音声による教育が充分なされたあとで，文字指導に入っていかなければならない。そして，間違いをすることを恐れずにコミュニケーションをとろうとする好奇心いっぱいの子どもの時期に，英語のスピーキングの訓練，コミュニケーションをとる態度，心構えなどを教えておくことは理にかなったことといえよう。

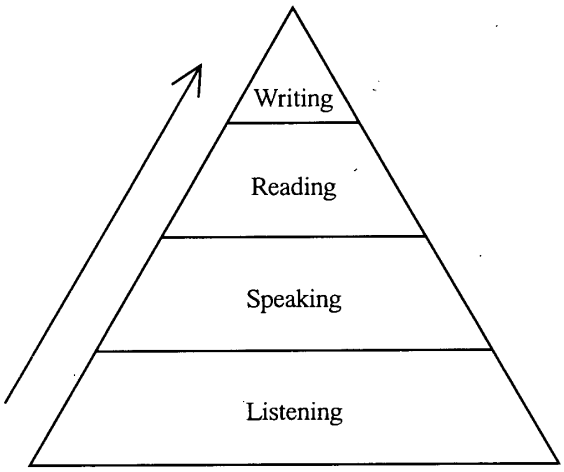


図1　言葉の4技能の習得過程

しかるに，従来の日本の中学，高校の英語教育は，リーディング中心で，それも横文字の英語を縦書きの日本語に訳すだけの授業が主であった。思春期以前の子どもとそれ以降のおとなでは言語習得に関してさまざまな違いがあるし，相反する研究結果も出されているので簡単には比較できない。が，あまりに文字偏重だった英語教育を何年間も受けたあとでは，4技能のピラミッドの底辺を成すリスニングやスピーキングの領域に逆行するのがとても難しいのではないかと推測される。

それを改革していくためには，まず，子どものときから英語に親しむようにして，音声による英語のシャワーをたくさん浴びせておいて，頭にインプットされた英語を中学校に入ってから英文法によって整理していくのがいいと思う。

小学校の英会話活動をさらに進めていくことは，平成15年3月に出された文部科学省の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」においても明言されている。

聞いてわかることが子どもの言語習得の第一であり，それもただ漫然と聞かせるだけでは

なく，英語の指示に従って体を動かす（Total Physical Response），英文を聞いたあとで正しく内容を表している絵を選ばせるなどのエクササイズをすることが必要である。大学生に対しても，漫然と聞かせることがないように，あらかじめ質問を投げかけておく，小テスト形式にするなどの工夫をして，集中力が持続できるような訓練をしなくてはいけない。

リスニングを指導しているとき，テープの音声であれ，直接の肉声であれ，ネイティブ・スピーカーの話す速度が学生の理解度を大きく左右することは誰しも気づくことであろう。もちろん，ゆっくりめの速度であれば学生の理解度は上がる。が，いつもそれでよいであろうか。学生たちにとって「速すぎる」と思われる英語も，それがネイティブ・スピーカーにとって自然な速さであるならば，それについていける聴解力を養うことが肝要である。教師がリスニング教材をいろいろと試聴してみれば，少しゆっくりめのものやナチュラル・スピードのものまでいろいろあることに気づくと思う。学生に最初から速すぎる英文を聞かせて，学ぶ意欲をそいでしまうのはよくないが，次のような教材もあるので，紹介させていただく。マクミラン社のリスニング教材は，１回目にナチュラル・スピードで英会話を流し，学生は「速い，難しい，わからない」という感想を抱くのであるが，２回目に少し速度を落として同じ会話を繰り返してくれるので，学生は「今度はわかった」という感覚を持てるようにできている。

それでは，リスニングの指導技術についてであるが，まずは，学生にしっかりと英語を聞く機会をできるだけたくさん与えねばならない。幼児は長い年月をかけて，母親や周囲の人間からすべての言葉を聞いて覚えていく。が，外国語として教室の中だけで教えられる言語は，系統的にしっかりと教えなければならないのである。その学生のレベルに見合ったところから始めて，そのすぐ上のレベルのリスニングタスクを要求していくようにする。

日本語を聞いているときも，一語たりとも聞き逃すまいという聞き方をしているわけではないのであるから，英文もナチュラル・スピードで，重要な意味のところを押さえていくような聞き方を指導していかなくてはいけない。

教師は学生が聞いたことを理解しているかどうかを確かめなければならない。リスニングは受動的な学習だと思われがちだが，実は頭の中では積極的な努力が行われている能動的な学習である。David Paul 氏は，その著書 *Teaching English to Children in Asia* の中で "active learning" ということを提唱しているが，それは何も子どもが教室内を元気に走り回るようなレッスンを指すのではなく，もし子どもが黙って机の前に座っていたとしても，パズルを解いて子どもの頭が活発に動いていれば，それが "active learning" である，と定義している。その意味で，リスニングの授業も "active" な学習といえる。

リスニングには主に４つの要素が必要である。

1．理解できる音を選択できる

2．聞いたことを覚えられる

3．聞いたことをすでにインプットされていることと結び付けられる

4．聞いたことに反応できる

教師はこの4つの要素をふまえたアクティビティーをレッスンの中に取り込んでいかなくてはいけない。以下に，初歩から会話の理解に至るまでのリスニングスキルのアクティビティーの例を段階的に挙げてみる。

〈基本的なリスニング〉

1）Alphabet & Number Games

本学の現代経営学部の1年生用共通テキストとして使用しているオクスフォード出版社の *New Headway* にも出ていて，中学一年生用のリスニングの問題集にもあるものであるが，とてもよいと思われるエクササイズがあるので紹介させていただく。会話体の英文がテープから流れ，学生はその中で話されている人名のスペリングがアルファベットで発音されるのでそれを書き取る，もしくは電話番号の数字が読み上げられるのでそれを書き取る，という訓練である。これは海外に出かけたら往々にして出くわすシチュエーションであるから必要性が高いし，学生に大事な情報を注意深く聞く意識や集中力を植え付けるのにとてもよいと思う。

メモをとらずに記憶するトレーニングとしては，教師またはテープの音声が数字を英語でいくつか読み上げていき，前出の数字の中から一つ繰り返して出てくるものがあるので，それを言い当てるというゲームがある。たとえば，テープから「25，74，43，69，58，97，82，74，56」という数字が英語で流れ，学生は重なって出てきた数字74を答えるというものである。チーム対抗で，一方のチームが読み上げた後，もう一方が当てる役をやるということもできる。

2）Identifying Words in Songs

これは児童英語でよく用いて生徒が喜ぶアクティビティーであるが，本学の外人講師の先生方も学生のためにクリスマス・パーティーを開くときなどに，皆でクリスマス・ソングを歌いながらこのゲームをしているのを参観したことがある。ある歌を歌いながら，その中で学生に認識してほしい単語，それはその歌の中で何度も繰り返し出てくる大事な単語にするのであるが，その単語が出てきたところで学生はサッと立ってまた座る，というゲームである。自らも歌いながらやるので，その単語の発音練習も意識させてやることができる。

〈やや進んだリスニング〉

1）Following Directions（クラスルーム・イングリッシュ）

クラス内の指示を出すためにも教師は英語を用い，学生が日本語を介在させずに反応できるようにしていく。クラスルーム・イングリッシュは実際の場面に合っているので，意味のある英語であり，学生の方も繰り返し聞くことで自然と覚えてしまう。なるべく動作で意味を伝え，初めは1つの動作に対していつも同じ命令文を使うようにする。学生が慣れてきたらバリエーションを使ってもよいが，同じ動作で言うようにする。

例　Open your book to page 10.

Let's look at page 10 today.

Take out your pencil.

Get your pencil ready.

Close your book.

Put your book away.

Pass the paper, please.

2）Listening for Sounds

これは学生が音に敏感になるようにするためのアクティビティーであり，児童英語の場合は，ペアを作ってそのターゲットとなっている音が聞こえたら相手の手のひらを叩くようなゲームをしたりするが，大学生の場合は，[r] と [l] の聞き分け，[v] と [b] の聞き分けなどをクイズ感覚の小テストにして行うとよいと思う。

3）Listening in a Series

学生たちは輪になって座っている。学生Aが右隣の学生Bに質問（たとえば "What did you have for breakfast?"）をし，学生Bが答える。学生Bが同じ質問を右隣の学生Cに発し，Cが答えて次にDに聞く……というチェーン・プラクティスを行う。その後，誰が何を食べたか一番たくさん覚えていて発表できた学生が勝ちとなるゲームである。

〈意味理解のリスニング〉

リスニングの習得で大切なのは，単語の聞き取りから連続した言葉のかたまりの聞き取りへと結びつけることであり，これが最終目標である長い文や会話の理解へと進んでいくステップとなる。

1）Pictography

教師がある情景を英語で描写し，それを聞いて学生一人一人は絵を描いていく。これは特に前置詞を聞き取って学ぶために有効なアクティビティーである。

例　There's a house by a brook. There's a pond in front of the house.

あとでできあがった学生の絵を見せ合うと楽しいアクティビティーになる。

2）Critical Listening

同じテーマではあるが異なっている２枚の絵を提示して，教師はどちらの絵の説明であるかは言わずに英語で描写をする。キー・ワードが聞き取れれば，学生はどちらの絵の説明であるか当てることができる。この方法で，反対語を導入することもできる。

3）Listening to Each Other

学生同士でＱ＆Ａをさせるのであるが，学生は自分が話すことで精一杯になってしまい，相手の答をきちんと聞いていないことがある。それをチェックするために，あとで相手は何と言ったか発表させるゲームにすると，注意深く聞きそれを覚える努力を心がけるようになる。店屋の店員と買い物客，というような場面を設定して行い，ロールプレイをさせるのもよいペアワークになる。

4）Listening to Stories

物語の聞き取りは，英語の「カン」を養うのにとてもよい方法である。たくさんの絵や写真があれば，単語を知らなくても意味の見当がつく。新しい語彙や表現，文型に触れることもできる。イースターやハロウィーン，クリスマスについての短くて楽しい物語を聞かせれば異文化に触れさせることもできる。あらかじめ，それにまつわる語彙を導入しておき，ビンゴシートの９つの枠に学生が適宜，語を入れておき，ストーリーを聞いてその単語が出てきたら消していき，最初にビンゴになった人が勝ち，というゲーム仕立てにすることも可能である。

以上，児童英語からヒントを得て考えたリスニング指導のアイデアをまとめてみた。大学生にとっては幼稚に思われるものもあるが，初級のリスニングから始めないといけない学生も相当数存在する。そういう場合には，ゲーム的要素を大いにとりいれてもいいのではないかと思う。ネイティブの先生の授業を参観すると児童英語で用いているアクティビティーと共通のものがいろいろと使われていることに気づく。語学が苦手な学生でも，こういう方法を取り入れれば楽しく学ぶことができるのではないだろうか。

3．スピーキングを中心とした指導技術

周囲の環境からどんどん知識を吸収する力は，年齢が若ければ若いほど大きく，徐々にその力は下がっていく。それとは逆に，論理的にものごとを理解する力は年齢とともに上がっていき，その両者のグラフが交差するのが10歳頃と言われ，児童英語教育では，これを「10歳の壁」という。10歳までは素直な子どもの要素が強いので，どんどんリピートさせて，英語を口から発声する練習をさせ，10歳を過ぎて自我が強くなる頃からは，そのような単調なリピートを嫌う傾向が出てくるので，それまでに身につけた文型を用いて自分のことを発表させるようにする。これが子どもの発達に合ったスピーキングの指導法であると思う。

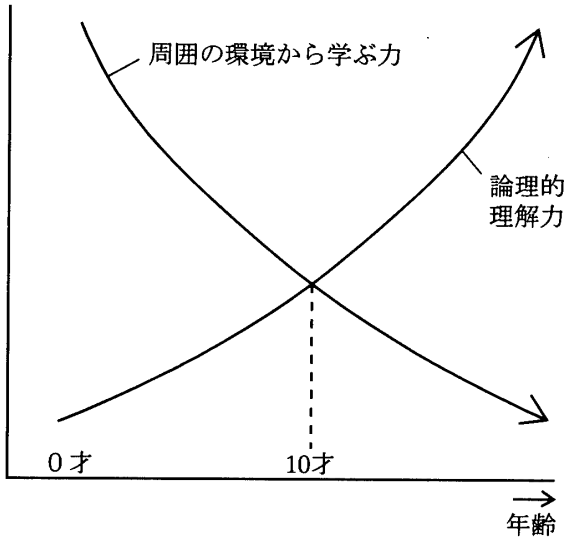


図２　年齢による子どもの学習能力

日本の子供が英語を習うとき，週に１回１時間のレッスンを受けるということが多いのであるが，子どもが英語を話せるような指導をするためには，このわずか１時間の中でなるべく生徒が英語を口から発する時間が多くなるよう，student-centered であるレッスンを教師は常に心がげていなくてはならない。

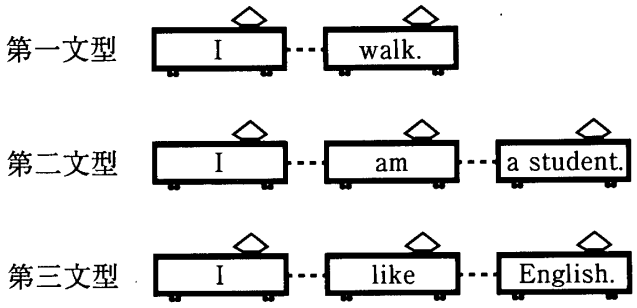
子ども同士のペアワーク，グループ・ディスカッションを取り入れることも多くなるであろう。その時に私が是非用いたいと思っている方法は，ケイガン博士の「平和をめざした英語教育」のワークショップで習った方法である。ペアでの会話，グループでの会話のとき，えてして，ある特定の生徒ばかりがたくさん発話し，一言も発しないままその時間が終わってしまう生徒がいることが往々にしてある。こういう場合，教師がストップウォッチで厳密に時間を計りながら，発言する生徒をきちんと順番で交代させていき，誰もが平等に発言する時間を持つというようにする。毎回毎回のレッスンをこのようにすることで，力のある子だけがたくさん発言してしまうことを防ぎ，誰しもが平等でなくてはならないということをクラスのやり方を通じて子どもに教えていく。平和教育といっても，平和についての講義を長々と聞かせる必要はないのであって，ハンディキャップのある子もきちんと公平に取り込み，その子の意見にもみんなが耳を傾けることで，民主主義や平和ということを身につけさせていくというものである。本学の外人講師の授業を参観させて頂くときに，気になることがある。学生のグループ・ディスカッションがよく行われているのであるが，どうしてもある特定の学生ばかりが発言し，あまり

参加していない学生も多く目についた。ぜひとも，ケイガン博士の方法を用いながらグループ・ディスカッションをさせたいと思う。

〈MAT Method〉

児童英語教育の第一人者の一人である仲田利津子氏は，アメリカで生まれ育ち，週1回の日本語学校に通っていたが，そこの授業が翻訳中心であり，会話や楽しいゲームや歌もなかったので，長年日本語を勉強したにもかかわらず，いざ来日したとき自分の言いたいことも満足に言えないという体験をした。その自らの体験をもとに彼女が編み出した児童英語の教授法は，必ず子どもが英語で会話ができるようにするという情熱に満ち満ちている。

私の学生たちが小さいころに通った英語教室の話を聞くと，英単語のカルタ取りをして終わった，という学生があまりに多いので驚かされる。名詞を教えるだけでは，センテンスで話す英語力は絶対につけられない。もちろん最初は子どもになじみのあるものの名前から始めるのはよいが，その上に，主語，動詞を積み上げていく Building Block 方式が必要となる。私は，現代経営学部の学生たちに英会話を教えるときには Train 方式と名づけて，



という絵を描きながら学生たちの頭にイメージが入りやすいようにして指導している。この五文型を教えるときには，やはり動詞が重要になってくるのであり，動詞を重視して教える仲田氏の方法は，大学生の英会話の授業にも生かせると思う。

仲田氏は子どもを対象とするときは，まず動詞をアクションで導入する。体を使って教えることで意味がはっきりするし，文字に頼らず聞いたままに発音させることができる。教師はまず教える内容の模範を示し（Model），動作（Action）を使ってインプットし，次に生徒にたくさんのアウトプット（Talk）の機会を与える。この頭文字をとって MAT Method という。彼女はレッスンの時間のうちの80%を生徒の発話に費やしており，暗記ではなく，自分で英語を話す練習を集中的にたくさん楽しくやらせている。「生徒中心」（student-centered）のレッスンであるため，生徒の集中力が途切れないし，意欲も増して，確実に「使える，生きた英語」が身についていくという。MAT Method では，英語を聞いたら，頭の中で翻訳することなく即座に英語で反応できるように，ナチュラル・スピードで聞き取

り，自分もナチュラル・スピードで話せるように訓練するそうである。そうしないと，ネイティブ・スピーカーとコミュニケーションする力がつかないからである。

彼女は，会話の要素を Answer（答えること），Ask（質問すること），Tell（自分から何か言うこと）の３つに分け，それがうまく積み重なって Talk（会話）が成り立っていることに気がついた。そこで教師は意識して毎回のレッスンではこれらの要素がすべて入るようにプランをたてる。リピートさせるだけではなく，子どもたちが互いに質問し合ったり答えたり，自分の意見を言ったりできるようにし，英語で考える力をつけていくようにしたところ，生徒たちの英語力は目覚しく進歩を遂げたそうである。

時制を教えるのが苦手だという英語教師も多いのだが，仲田氏は，習った動詞で簡単な文から指導していき，次々と時制や文を Q & A で生徒同士で言えるようにしていく。これを Verb Sentences と呼ぶが，can から始めて，every day, always, sometimes を加えていき，次に like to, have to, want to, 過去形，be going to, Have you ever～? などを教える。生徒には日本語で言えること，言いたいことを英語でも言わせることが大事なのである。自分の生活に関係のある会話ができるようになると，英語がより楽しくなり，自分から覚えようという意欲を持つようになるという。

David Paul 氏も，子どもは自分に関係のないことをリピートさせられても何の関心も持たない，自分に関係する本当のことを言わなくてはならないのだ，と書いている。

短期大学の英語英文科の時代には，スピーキングの授業であるのに，外人の先生だけが話していて，学生には発言のチャンスがなく，リスニングの授業になってしまっている例もたくさんあった。それも学生が不満を述べに来たのでわかったことなのであるが，「スピーキング」という目的を掲げた授業は，授業時間の80％を学生が発話するような授業とし，外人講師が担当しても日本人講師が担当しても，teaching method さえしっかりしていれば可能な科目だと思う。現在の短期大学の外人講師の先生方の授業は，学生の発話が多くなるように工夫されているので，是非ご見学になるといいと思う。東洋学園の新しい英語カリキュラムでスピーキングを重視するのであれば，その指導目的をきちんと自覚した教師が系統だったシラバスに基づいて，学生のペアワークをたくさん入れ，よいテキストを用いて授業すべきだと思う。

〈Making Speeches in English〉

今，東洋学園の学生がめざすべき英語力は，正しい国際感覚を身につけた日本人として，世界に向かって発信できる英語力だと思う。その力を育成するために，自分の問題意識を高め，調べ学習をし，考えたことを英語の文章として構成し，大勢の人の前で発表するスピー

チの指導は，実にこの目的にかなったものだと思う。児童英語教育においてもフォニックス研究第一人者である松香洋子氏が英語発表会の重要性をいつも強調しておられる。

東洋を卒業してから留学した学生の話を聞くと，大学編入前のESLにおいてスピーチをさせられることがとても多いようである。アイダホのルイス・クラーク・ステート・カレッジ，ユタのユタ・バレー・ステート・カレッジ，カナダのウィニペグ大学，いずれのESLも学生にスピーチをさせるので，東洋でスピーチの指導を受けた経験のある学生たちはそれが外国でとても役立ったと異口同音に話してくれた。

マン・ツー・マンで指導する時間が多くかかるので，教員にとって負担のかかる授業ではあるが，学生たちが体験したことや考えていることを教師側が知るよい機会ともなり，苦労は多いがやりがいのある teaching method である。書くスキルもプレゼンテーションのためのスキルも身につけることができる student-centered の英語教育法であり，学生自身の達成感も大きい。

東洋女子短期大学では，12月に行われる「フェニックス英語発表会」をめざして，ライティングの授業時間などを使いながら，学生一人一人がどんな発表をしたいと思っているか，その自主性に基づいてきめ細やかな指導をしている。

4．リーディングを中心とした指導技術

以上，リスニングとスピーキングは，「外国の人と流暢に英語で話がしたい」という昨今の日本の大学生のニーズ，そして真の国際人として持つべきコミュニケーション・スキルを育成するために考えたことをまとめたのであるが，本学の学生にとりわけ強化してほしい力は英語を読む力である。TOEICのスコアを見ても，本学の学生のリーディングの力が不足していることは明らかである。

日本では，英語を日本語に直すことが読む行為であると誤解され，英文講読の授業もただただ和訳を淡々とやっているという形式がまかりとおってきた。が，ここをまず見直さなくてはならない。

児童英語においては音声英語が主なので，文字を示したり，読みを教えるべきではないと主張する専門家もいる。が，実際のところは，日常生活において英語の文字にさらされている子どもたちは，文字に自然な興味を示すのであり，英語を読みたい，書きたいという自発的な意欲を摘み取る必要は全くないといえよう。読みたいという気持ちを持つ子どもには，学習者に負担のかからない方法で，読むことの楽しさと効果的な方法を示していくのが教師の大事な役割であろう。えてして，読むことが日本語であれ英語であれ，あまり得意ではない学生が多い本学においては，リーディングの授業にあたって，まさにこの同じ原則があて

はまると思う。

東洋女子短期大学では，派遣の外人講師の先生によるスピーキングの授業開始が５月であるので，それまでの空き時間を利用して，学生にリーディングの課題を出している。図書館でそろえて頂いた簡単な英語の読み物を読ませて，その最後のページにあるアクティビティーをやらせ，読後の感想を書かせるということを行っている。その結果，「最初は英語の本を読むなんてとても大変と思っていたけれど，読んでみたら案外，短時間で一気に読めて楽しかった」という感想が大部分を占めた。オクスフォードからは，一番やさしいものから徐々にレベルを上げていく読み物のシリーズが出版されている。これを利用して，是非この活動を年間を通して学生に続けてもらう「リーディング・マラソン」というプロジェクトをたちあげたいと考えている。学生が１冊読み終わるごとにアクティビティーをしたり感想を書いた紙はまとめてファイルし，後述する各自の「英語カルテ・ファイル」に綴じ入れる。もちろん，教師はそのペーパーを読んで何らかのコメントを付して返却するということをしなくてはいけないが，これも学生の自己学習の大事なサポートである。

多読と並行して速読も指導したい。特に四年制大学への編入試験を目指す学生や TOEIC のスコアアップをねらう学生に私がいつも勧めていることは，速読の問題集を毎日必ず15分やることである。時間を計って読み，質問に答えて自分で採点をし，その結果をグラフにつけていくと，１ヶ月ほどたったところで自分の読むスピードが上がってきたことを自覚できるはずである。

以上，多読（Extensive Reading），速読（Rapid Reading）は自己学習の課題とし，精読（Intensive Reading）はゼミ形式で少人数の学生が教師を囲んで行うのがよいと思う。脇山怜教授の勉強会のようにジャパン・タイムズを読むのでもいいし，英文学の得意な先生と英語の小説を読むのもいいし，学生は自分の興味に応じて何らかの英文講読ゼミに入って，先生の生き生きとした解説を聞き，文構造の確認なども行いながら，仲間の解釈にも耳を傾け，深く正確に読み取る教育を受けてもらいたい。

リーディングの力をつけるためには，語彙力，文法力が必要である。また，英語を読んで深く理解するためには，その内容についての背景的知識がなくてはならない。学生の知性・感性を育む英語教育のためにも，リーディングの授業は大事なものである。

かつてはリーディングは，読み手がテキストの意味を暗号解読的に解釈するものであると理解されていたが，近年では，読み手が内容に関してすでに持っている知識（内容スキーマ）や，言語・テキストの構成などに関する知識（形式スキーマ）を積極的に活用する行為と考えられている。つまり，リーディングのプロセスは，読み手が先行知識を活性化し，予測または推測し，検証し，確認し，書き手の意図を読み取る相互作用的読解過程とみなされ

る。

リーディング前の活動として，本文に関わりのある絵，図表，グラフなどの資料，または写真などを示し，学生の内容スキーマの活性化を図る。本文のキーワードをあらかじめ学習させ，それらを黒板に書き出して，関連する語を並べたり，線で結んだり，分類したりすることも有効である。

次に本文を黙読させて内容を理解させる。1回目はトピック・センテンス（パラグラフの内容を最もよくまとめてある主題文）を探させ，キー・フレーズ・リーディングをさせる。フレーズ・リーディングというのは意味のまとまりごとに読む読み方であり，キー・フレーズ・リーディングは，フレーズ・リーディングをしながら，特に重要なフレーズを中心に読んでいく方法である。2回目の黙読のときは，内容をスキャンさせるために，あらかじめ読み取る内容を指示しておく。学生はその指示された部分だけを読み取る。3回目では，後にクラスの友人とディスカッションをすることなどを頭におきつつ，内容に関わる英問英答をして，深いリーディング活動に導く。

その後，内容を理解しながら音読させる。内容を第三者に伝えるための表現の仕方などを工夫する。クラス全員が声を合わせて読むコーラス・リーディングや，各自がそれぞれのペースで音読する buzz reading，テープがあればシャドウイングなど，適宜取り入れるとよい。

最後に内容把握のまとめとして，本文内容を表にまとめさせたり，パラグラフ構成を分析させたりして，学生の形式スキーマが充実するように導く。また，本文概要を自分の英語でまとめさせたり，タイトルを考えてつけてみたり，自分の意見を書かせたり，発表させたり，グループやクラスでディスカッションする機会を持ちたい。ちなみに，仲田利津子氏は，児童英語教師に求められる英語力として，中学3年生の英語教科書を1ユニット黙読してから本を閉じ，その概要を英語で言えることという一つの基準を提示している。児童英語教育課程の学生にも，ぜひともこれはやらせたい課題である。

リーディングの授業では，速読にも役立つスキミングとスキャニングのトレーニングも指導したい。スキミングとは飛ばし読みのことであるが，トピック・センテンスと，その内容を説明するサポーティング・センテンス（支持文）を識別しながら，トピック・センテンスが主張している内容を文章全体からまとめて読み取る読み方のことである。スキャニングとは探し読みのことで，一定の指示や目的に沿って，必要な情報を探し出して読み取っていくのである。スキャニングは各種資格試験問題対策としても活用できる。しかし，新聞や雑誌などでは問題の質問文がついているわけではない。が，そういうときでも5W1Hをあらかじめ想定しておいて，本文から探し読みを行うようにすると，早く正確に全体の内容を読み

取ることができる。

ここで注意しなくてはいけないことは，多読と精読の両方を練習したとしても，多読は粗雑に読み，精読は一字一句辞書にあたりながら和訳するというのでは，どちらも英語を読む力を養うことにはならないということである。多読のためにスキミングやスキャニングをやって，重要な部分が飛ばされてしまうこともある。また，知らない英単語が出てくるたびに辞書をひき，その単語の下に日本語で意味を書き込むだけでそれ以上の読み取りが全くできていない学習者があまりに多い。パラグラフ内の構造，前後の文相互の関係，パラグラフごとの展開などを考察する学習がされてこなかったために，概要を把握するとか，筆者の主張を読み取るとか，そこで記述されている状況をイメージするということができないのである。

英文講読の授業は古臭い退屈な授業として，学習者からも教師からも敬遠される傾向にあるが，東洋学園としては，ボキャブラリー・ビルディングやグラマーの体系的復習と並行させながら，楽しく，かつ効果の上がるリーディングの授業をめざして改善を図るべきだと思う。学生と教師の双方で，多読，速読，精読の目標を定め，目的意識を持って授業に臨み，実績が上がっていることをグラフなどであとづけしていくことが望ましい。効果が目に見える形にすれば，教師の方も学生の方も読解の授業に対する意欲が高まるであろう。

5．ライティングを中心とした指導技術

講読の授業が単に英語を日本語に訳す作業だけであってはいけないのと同様に，英作のクラスも，ただ日本語を英語に翻訳するだけではいけないということをまず確認しておきたい。「書く」という行為は，手紙を書いたり，レポートを書いたり，ノートをとったり，感想文や小説，詩を作ったときに人に見せたり，情報を保存するために「書く」ことである。それが，たとえ講義や演説の記録であっても，書かれた情報の要約であっても，必ず，書き手の能動的な「意志」の入った行為でなければならない。これは，書き手の考えを伝える自己表現の手段であり，書かれた内容は，当然，書き手によって異なるものでなければいけない。したがって，日本語で書かれた文章を決められた数の語彙を使って英訳せよ，といった類の課題が「英作文の問題」と呼ばれたりしているが，これはある語彙または語句の使用法の練習であり，「英文を書く」指導のごく一部分であり，たいていの場合，前段階であることに留意しておかなくてはいけない。

もちろんライティングの指導には，①書写（copying），②制限作文（controlled composition），③自由作文（free writing）の３段階があり，アルファベットを書く練習から始まる。その後，書写に進むが，語や文をただ書き写すだけでは機械的になり何も頭で考えない

作業になってしまうおそれがあるので，故意に誤りを入れてある文を訂正しながら書かせたり，欠けている文字を補わせたり，配列の乱れを正しく書かせるなどの工夫をするとよい。また，大文字，句読点，indention，分綴法も指導事項に含める。書写にあたっては，フォニックスを取り入れて，発音と綴りの関係に関心を向けさせ，書く前や書きながら音読をさせるとよい。学習したことを書写することで知識を確実にすることができ，優れた文章を写せば，表現の細部にまで注意が向けられ，表現の蓄積ができる。見ないで書けるようになるまで練習するのは「暗写」である。私は，映画を使っての授業で出てくる useful expressions のよい例文をいくつか学生に暗記させ，次の授業の始めに小テストとしてそれを暗写させている。

学ぶに値する優れた文章を日本語に訳しておき，しばらくしてから訳文を頼りに原文を復元する学習方法を「復文」(retranslation) という。文法事項に重点をおいた文単位でも，長文で構成の優れた文章でもよい。フランクリンが文章修行としてこれを実践したことは，彼の自伝によってよく知られている。

和文英訳偏重の英作文授業から脱却する必要性を先に述べたが，この活動を軽視するわけではない。母語である日本語を cue として英語に翻訳する作業は，文法事項，文型，語彙の表現形式の訓練に有用であるし，日英の発想や表現の差異に気づかせることもできる。本学の English Training の授業でも，日本語を見てすぐに英語にして話す訓練をしているが，やはり日本人である以上，いきなり英語で考えて英語が発せられるようになるわけではないのであるから，このプロセスを経なくては，次の段階へは進めないであろう。

母語を cue とする和文英訳に対して，英文を教材とし，書く内容や形式に何らかの制限をつけておいて英語に訳させる方式を，制限作文という。制限の程度や形式もさまざまで学習者の段階に応じて考案できる。同じ目標構文でも，制限の大きい形式から自由度の大きいものへと段階的に練習させることも可能である。①学習の目標が明確である，②書く題材も与えられるので何を書くかで悩まなくてすむ，③誤りをできるだけ犯さないようにさせられる，などの利点がある。自由作文に至る段階として活用され，与えられた文型を用いて自分自身のことを表現させれば，コミュニカティブな活動に近づけることもできる。戸田奈津子氏が本学での講演において，大学時代に英作文の練習をたくさんしておいたことが，いざ，英語を話す必要に迫られたときに大変役立ったということを話された。概して学生の人気が高いとはいえない英作文のクラスも，この勉強がスピーキングにも通じていくのだというアクティビティーを入れて活気あるものにしたほうがいいと思う。

児童英語では絵を見せて英問英答させたり，子どもが絵の中で発見したことを自由に発言する “Tell Me!” という活動を行うが，中学生以上のライティングの授業でも，視覚教材を

cue として英文を導き出す方法が急速に広まっている。絵は文と違って厳密ではないので，書く人の自由な創造や意欲を刺激し，多様な表現を生み出させることになるのである。

自分の思想・感情を始め，表現したいことを自由に英文で書くという自由作文は，いわばライティングの最終段階である。が，その前段階の指導法によって充分な表現力を獲得した後に初めて行う活動であるということでは決してない。初級からでも構文や語彙が限られていたとしても，２文作文，３文作文として書かせることが大切である。自分や家族のこと，学校，町のことなど身近なトピックで手紙や日記，生活の中のメモの形で書かせる。

David Paul 氏も，児童英語教育において，子どもに自分自身のことを書かせるよう強く奨励している。子どもの場合，“like/likes” という文型を練習するのに，もしジョンという人間を知らないのであれば，“John likes bananas.” という人為的な文を発話したり書いたりすることはないのである。そのかわりに，“I like baseball.” “My dog likes me very much.” というような文を言ったり書いたりするのである。内容的に自分に関係のない形で文型を学んでも，その文型を使って自分の個人的なことを表現できるようにはならないのであるから，最初からその子ども自身にとって意味のあることを言ったり書いたりするために文型を使う，ということをずっとやっていかなくてはいけないのである。しかし，このことは何も子どもがいつも自分の個人的な事柄のみを表現しなくてはいけないということではない。素敵な絵を見て，それについて何か言う，もしくは書く，または窓から外を眺めて見えたものについて何かを言うとか書くのでもよい。

意味を持った文は，短い会話や１パラグラフの作文に発展していく可能性を秘めている。しばらくして，子どもが１パラグラフずつ書くのに慣れてきたら，次は英語で日記をつけるように奨励するのがいいということである。そして，そのとき教師は子どもの書いた英語を厳密に訂正してはいけないという。子どもがちょっとつまずいている文型に気づいてあげ，授業の中で，もしくは宿題としてその文型をもっと練習できるようにしてあげればいいという。

これは中学生以上の学習者についても当てはまることであろう。自分の考えを英語で表現してみる意欲が大事なのであるから，あまり細かく英語の間違いを直しすぎては，その意欲をそぐことになってしまう。学習者の書く意欲を引き出すように，ほめて励ますという観点から添削することを心がけるべきである。

“creative writing” の楽しさを教えるのに次のようなアクティビティーがある。前述したケイガン博士の平和を目的とする授業法にも関連してくるが，子どもまたは学生に “cooperative learning” をさせるグループワークの英語授業が考えられる。たとえば，ある小説の一部を読ませたり，結末がはっきりしない小説の最後を読ませて，その先，登場人物たちが

どうなるのかを学生に推測させ，グループで話し合いながらストーリーの結末を作らせるのである。

私は映画の授業においても，『小さな恋のメロディー』などは，二人の小学生の男女がトロッコを使って駆け落ちしていくシーンで終わるので，この先，この二人がどうなったであろうかを想像させ，グループ単位でストーリーを作らせる。これは，もちろんグループごとの口頭発表をクラスで行うとよい。平和をめざす授業のために，グループの一人一人が平等に発言する，ということを重視するのであれば，次のようなアクティビティーもある。「今，この教室の窓の外側に宇宙からやってきた不気味なエイリアンが張り付いている」というのを第１文とし，連歌のごとくに一人ずつが１文ずつ付け足していって，ストーリーを展開させていくのである。これも皆が英語で記録をとり，あとでクラス内で発表をさせる。これは，SF 仕立て，もしくはホラー仕立てのわくわくするレッスンとなる。

前述した英語発表会も，もちろん “creative writing” のクラスがめざす大きな目標地点となる。私は，授業と学校全体の行事が連携していることは，授業の活性化になるのではないかと考えている。本学の英語発表会においては，①自分の書いた英文をメモライズしてスピーチという形式で発表する，②原稿を読み上げる「音読」という形式で発表する，もしくは，人前で口頭発表するのが得意でない学生は，③人に見せられるブックレットの形にまとめて展示する，④大きな模造紙にポスターの形式で書いて展示する，という４つの発表の型を学生が選べるようになっている。

いずれにせよ，めざすべきライティング・スキルは，「書く内容を選び，創造的に考えを発展させ，特定の読者（もしくはオーディエンス）を念頭におき，目的に沿った書き方のできる技能」ということになる。学習指導要領でも「文章の構成や展開などに留意して指導するものとする」とあるが，パラグラフの指導が重要になる。１つのパラグラフがトピック・センテンス（主題文）とサポーティング・センテンス（支持文）から成り，その展開は，①具体例，②分析，分類，③比較，対照，④原因，理由などの形をとることを理解させる。これは読解力を高めるためにも有効であることを強調してやりたい。次に複数のパラグラフをどう構成するかであるが，Introduction（序論），Body（本論），Conclusion（結論）の三部構成になることが多く，これは１つのパラグラフ内でもあてはまる構成であるが，この３つの部分の分量の比（全体を10として２：５：３が目安）にも注意を向けさせたい。Introduction と Conclusion の内容が首尾一貫していること，１つのパラグラフには１つのトピックという原則も強調したい。文章を書き上げるには，構想を練るところから始まり，パラグラフ構成を考えて第一草稿を書き，何度も推敲して最終稿が出来上がるのだという過程を学ばせることも大切である。

6．4領域を有機的に関連づけた授業例

以上，英語の4領域のそれぞれを中心とした指導技術について述べてきたが，この4領域をバラバラに教えるのではなく有機的に関連づけることが重要である。2002年より施行されている中学校学習指導要領においても，言語活動の「話すこと」と「書くこと」に，「聞いたり読んだりしたことについて，問答したり意見を述べ合」ったりすること，および「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり，感想や意見などを書」いたりすること，と記述され，聞く，読む，話す，書くの関連づけの必要性が示されている。高等学校の学習指導要領の科目の「内容の取り扱い」においても，オーラル・コミュニケーションのⅠとⅡでは，「読むこと及び書くことも有機的に関連づけた活動を行うことにより，聞くこと及び話すことの指導の効果を高めるよう工夫するものとする」とあり，英語ⅠとⅡでは，「聞くこと及び話すことの活動を多く取り入れながら，読むこと及び書くことを含めた四つの領域の言語活動を総合的，有機的に関連させて指導する」とあり，リーディングでもライティングでも四つの領域の有機的関連付けが指示されている。

従って，4つの領域のどれか一つの領域に焦点を当てようとする授業の場合でも，他の領域とのかかわりを切り離すことはできない。4つの領域を相互に関係付けた学習は，学習者の脳裏への定着度が高く，それだけ深い理解となるということで効果的でもある。

以下に，私が東洋学園で行っている4つの領域を関係付けた授業例を示してみる。

〈English Through Movies〉

ここでは，学生に最も好評な映画として『アウトサイダー』を取り上げる。Susan Hintonが書いたベストセラー小説 *The Outsiders*（1967）を映画化したものであり，フランシス・コッポラが監督である。アメリカ南部オクラホマ州タルサの町に，対立する2つの若者の不良グループがあり，1つは下層階級に属し，もう一方は上流階級に属する。両者がもめたことから殺人事件に発展してしまうのであるが，主人公は本好きの少年であり，美しい朝の光景を見てロバート・フロストの詩を口ずさむ。そこを特に取り上げて授業では扱うのであるが，詩の脚韻がきちんと整っているので行末の単語をブランクにして，リスニングによって埋めさせる。1行が6音節から成るので，英詩のリズムも教えることができるし，頭韻も用いられている。内容もはかなく美しい若さがテーマで，“Stay gold.”というメッセージであるので，学生の共感を得やすい。英米文学プロパー，特に英詩を扱う授業が存在しなくなっている現状において，映画の中に出てくるいい詩を教えられることは貴重である。この詩の前後の会話がテキストに採録されているのであるが，文法的にも，usageとしても，

重要構文となるものが4つ取り上げられ，例文もいくつか付けられている。学生はテキスト部分も重要構文の例文もすべて音読し，英詩と重要構文を次回の授業までに暗記してきて，小テストとして暗写することになっている。英詩のリーディングと口語英語が組み合わさったいい教材だと思う。映画全体にも useful expressions がたくさん入っているので，それをリストアップしたものを見ながら学生は英語を聞き，見つけ出していく。映画を見終わったあと，story retelling や感想文を英語で書く活動をしてまとめとする(1)。

子どもに英語を教える場合にも，ビデオ教材が学習者をひきつける有効性について大いに感じるところがあったが，それは現代の大学生を対象としても同じことである。映画をはじめ，質の高いビデオ教材を用いての総合英語の授業研究はさらに進めていきたいと思う。

〈English Through Pop Music〉

児童英語においても「音楽のない児童英語などありえない」と言われるほど English Through Music は重要であるが，大学の英語授業も音楽を教材とすることで魅力的なものにすることが可能である。カナダのウィニペグ大学でも，カナダ人のアーティストをリストアップして，学生が分担してそれらのアーティストをインターネットで調べ，ライフストーリーや音楽の特徴を英語でまとめてクラスでプレゼンテーションするというアクティビティーをやっていた。学生に人気のあるマライア・キャリーのスターへの道は，自分からアピールしていくアメリカ人らしさも窺うことができるし，“Hero” という曲の歌詞にはすべての人を勇気づけるメッセージもこめられている。私が授業で使用している2冊のテキストでは，アーティストのライフストーリーをリスニングさせて要点をとらえるために英語の質問に答える，歌詞の内容の解説を書いた英文を読ませる，その歌詞を聞いて穴埋めをするときに日本人が聞き取りにくいリンキングをポイントとしたエクササイズをこなしてから，その点に注意しながら歌詞を聞き取る，という言語活動ができる。これに私は随時，学生に自分が好きな音楽のことやアーティストのことを書かせる自由作文を入れている。メロディーが耳になじんだ曲を取り上げても，歌詞をじっくり読み解いてみると新たな発見があり，学生にとっても教師にとっても楽しく，リスニングが入るので集中できる授業となる。

7．おわりに

外国語を教えるための教授法（approach, method）には様々なものがあり，ざっと挙げてみても，①文法訳読法（the Grammar Translation Method），②直接教授法（the Direct Methods），③オーラル・メソッド（the Oral Method），④オーラル・アプローチ（the Oral Approach），⑤コミュニカティブ・アプローチ（communicative approaches），⑥ナチュラル・

アプローチ（the Natural Approach），⑦タスク中心教授法（task-based instruction），⑧内容中心教授法（content-based instruction），⑨学習者中心教授法（learner-centered instruction），⑩コンピュータ支援教授法（computer-assisted instruction [CAI]/computer-assisted language learning [CALL]）などいろいろあり，それぞれが独自の特徴を持っている。実際の教室指導においては，どれか一つの教授法だけを用いて授業を行うことは難しく，これらを適宜組み合わせて自分なりの指導法を作り上げていくことになる。

この他に，個々の指導技術（techniques）というものもあり，第二言語習得の認知プロセスと外国語指導技術を表にまとめたのが以下である。

この認知プロセスを促進するものとして，また4領域を有機的に関連づけた英語教育をするためにも，文法指導の役割ということも重視していかなくてはならない。これは意味中心の言語活動に組み込まれたときに効果的であるとされている。つまり，文法だけを他の活動から切り離して指導するよりも，コミュニケーション活動の中で必要に応じて学習者の注意を言語形式に向けさせるのがよいのである。

それに対して，これからの小学校英語の方向性としては，content-based approach が優勢になっていくであろうといわれている。これは，語彙や文法などの言語構造を中心とするの

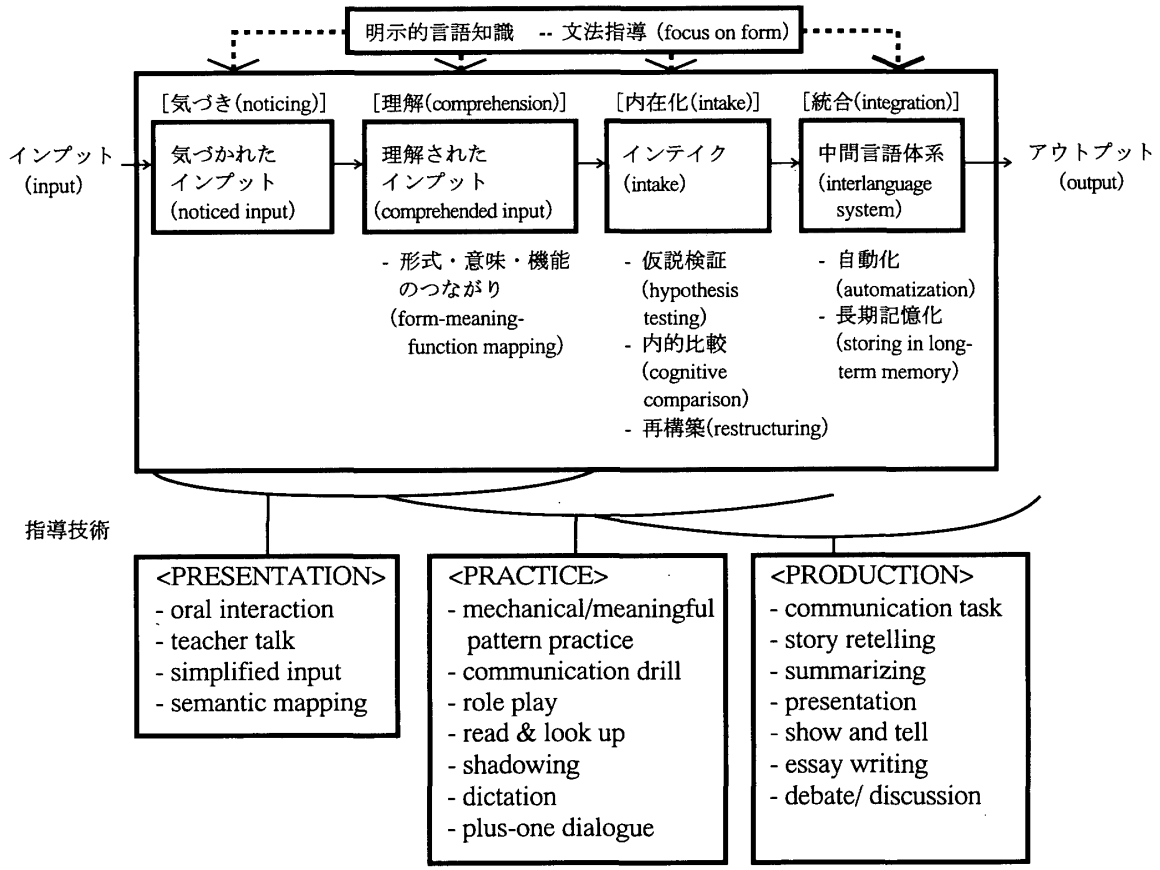


図3　第2言語習得の認知プロセスと外国語指導技術(2)

ではなく，教材の内容を重視する。内容について理解し，内容についての考えなどを表現する言語活動を行うことによって，外国語能力を伸ばすものである。「総合的な学習の時間」の国際理解の中で扱われる英語授業では，グローバルなトピックを扱うことが多くなる。

英語があまり得意でない，英語にたいして興味がないという大学生に対しては，児童英語で用いているメソッドで有効だと思われるものがいくつもある。

教師が教え込もうとするのではなく，教室の facilitator となって，学生中心の授業，学生が考え，自ら動いて口を開き，自分のペースで学んでいけるような授業を心がけたい。パソコンルームで自分のレベルに合った楽しい CD-Rom で学習し，ある段階をクリアーしたときに達成感があるような授業法も導入してはどうかと思う。

児童英語の student-centered lesson においては，子どもは実在の人間個人であり，彼らの知性のみでなく全人格と向き合うことが大事なのであるが，それは大学生に対しても同様であると思う。英語が苦手な学生には，語学に対する抵抗意識をまずなくしてもらうように努め，教室の環境作りにも配慮し，本人自らが英語への興味を取り戻し学びとる力を持つように教師は集中すべきである。本人の頭の中にできあがりつつある英語の構造の中に，新出事項がうまく統合でき，「わかった！」という感覚を持てたときに，学生の意欲はアップするのであり，教師はすべてを教えこもうとせずに学生に考える時間を与える辛抱強さが必要である。

チュートリアルの制度をもっと機能するようにして，学生各人がどのような将来の夢を持ち，そのためにどのような英語力が必要かということをチューターは把握して，学生の自己学習を支援するようにできればいいと思う。一年間の目標，各学期ごとの目標を教師と学生の双方がはっきりと意識し，科目ごとの焦点となる英語スキルの目標についてもいつも互いに確認し，毎時間毎時間の授業においては，そのためのどんなステップに到達すべきなのかを授業の最初にクリアーにすると，学習者の目的意識も高まるはずである。そして，学生の達成度の評価もなるべく細かく出し，グラフにして「伸び」がわかるようにしてあげたい。学生一人一人に「英語カルテ・ファイル」を持たせ，成績表や TOEIC のスコアだけでなく，リーディング・マラソンで１冊読むごとに課題としてやったペーパーや，プレゼンテーションのために制作したライティングの作品などをまとめて，自分の弱点を知ると同時に，「これだけやった」という自信にもつながるようなものを持ってもらいたい。学生がプレゼンテーションをしたり英語劇を上演したりしたときは，教師はそれをビデオに撮り，あとで本人に見せてあげてよい点をほめながら注意すべき点にもコメントを加えるようにする指導も入れていきたい。

学生にどのような授業を望むか尋ねると，「楽しくて，ためになる授業」という答が返っ

てくる。学生の興味を喚起するためには，楽しいという要素も重要だと思う。外人講師の先生方は，ハロウィーンやクリスマスのころには，授業をパーティー形式でやってくださるし，私の "English for Children" でも，子どもにどのように英米文化を教えるか，というデモンストレーションとして，このような行事の紹介は重視している。言語というのは文化と表裏一体のものであるから，外国語を教えるときにはその文化も一緒に教えていかなくてはいけない。

文化を学ぶということでは，海外文化演習は，条件さえ整えば最良の教育形態だと確信する。英語漬け（immersion）の生活を送り，サバイバル・イングリッシュを身につけ，様々な人種の人々と触れ合い，現地の食文化を味わい，家庭生活も体験する。海外文化演習に参加している学生の言語・文化を学ぶ意欲の強さ，モティベーションの高さ，コミュニケーションを一生懸命とろうとする態度は，同行した教員を感動させてくれるものがある。

私はネイティブ・アメリカン・セミナーの授業を通しても，アメリカ先住民の立場から見た英語，英国，米国の歴史，現代社会の様相，異文化を理解する態度，自分自身の生き方について，学生と一緒に考えている。彼らの料理であるフライブレッドをみんなで作って試食するという体験型授業の時間も組み入れている。今やグローバル化が進む中で，英語帝国主義ともいうべき英語の侵略が起きている。世界の人口の約４分の１である15億人が英語を使える人間であり，その中のたった４分の１がネイティブ・スピーカーである。つまり，残りの４分の３は，他の言語を母国語としながらも英語を外国語として学んで身につけた人々であり，中国でますます英語熱が高まっていることを考えれば，その人数は日ごとにふえていると言っても過言ではない。

中国語を話す人間は10億人であるが，それは主として中国国内にかたまっている。が，英語を話す人口というのは，すべての大陸に分布しているのであり，これは今やワールド・ランゲージとなっている。

しかし，英語国民によって征服され消滅させられてしまった言語も数多くある。アメリカ先住民においては，自分たちのもともとの言葉を失いかけている，もしくは失ってしまった部族が大半を占めている。言葉を失うということは彼らの文化も失われていくことになる。学生たちの多くは，「英語がペラペラ話せるようになりたい」というのであるが，英語がこのように世界に広まった背景としてどのような歴史的事実があるのかも学んでほしいと思う。

1996年以来本学にゲスト講師として毎年いらして頂いているジョーン・マッコーネル博士からは，「学生にもっと考えさせる授業」をすること，学生に勉強の習慣をつけさせること，というアドバイスを頂いた。David Paul 氏が提唱する児童英語の理想のレッスンとい

うのも，教師がすべてを明瞭に提示する教師主導のやり方ではなく，生徒をひきつけておいて，生徒が自分の頭で活発に考え，既習の事項と関連づけていくような授業である。学生に critical thinking を促すような授業が，active learning であり，student-centered lesson である。東洋学園の英語教育メソッドのキーワードとして，このようなポイントを導入してはどうかと考えている。

児童英語では，楽しく学習（楽習）し，効果がきちんと上がって，子どものコミュニケーション能力が高まり，自己のメッセージを発信する力もアップし，心・感性・人間性が豊かになる教育をめざしているが，これはそのまま日本の大学の英語教育にあてはめてもいい目標だと思う。願わくは，東洋学園の活性化された英語授業が起爆剤となって，学生のすべての教科に対するモティベーション，人生への意欲，志が高まることを望んでいる。教師全員が授業の方法を再検討し，学生に感動を与えられる授業ができるよう，熱意と愛情をもって臨むことが最重要であろう。

注

(1) Sakamoto, H., "The Outsiders－The Theme of a Poem by Robert Frost" 映画英語教育学会編『紀要・映画英語教育研究』第９号，2004年。

(2) 村野井仁・千葉元信・畑中孝實『実践的英語科教育法』成美堂，2001年，p. 55

参考文献

Ellis, G., and J. Brewster, *The Storytelling Handbook for Primary Teachers*, Penguin Books, 1991.

Kagan, S., *Cooperative Learning*, Kagan Publishing, 1992.

Paul D., *Teaching English to Children in Asia*, Longman, 2003.（金森強監訳・坂本ひとみ他訳『子ども中心ではじめる英語レッスン』ピアソン・エデュケーション，2004年）

飯塚成彦『そらから英語がふってくる』知人館，1988年

飯塚成彦『英語でいっしょに育つ本』全研，1997年

片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男編『新・英語科教育の研究』大修館書店，1994年

金森強『英語力幻想』アルク，2004年

瀧沢広人『アメリカンスクールはどう英語を教えているか』はまの出版，2001年

仲田利津子『こうして教える子どもの英語』アプリコット，1993年

中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社，2001年

樋口忠彦編『小学校からの外国語教育』研究社，1997年